JAELE Newsletter
上越英語教育学会通信
The Joetsu Association of English Language Education
February 1, 2014 No. 10

台湾の小学校英語

上越英語教育学会　会長
上越教育大学教授　北條礼子

みなさん、こんにちは。昨年の 7 月から学会長に就任した北條礼子です。定年まであと数年になりましたが、学会長として、この学会のためにできることがあれば、精一杯するつもりですので、宜しくお願い致します。今回は、現在担当している小学校英語教育について、紹介致します。

私は、ここ数年アジア諸国の小学校英語教育事情を知るため、毎年アジアの小学校を訪れています。これまで、ESL 国ではフィリピン、EFL 国では中国、台湾、韓国、タイ、インドネシアの各小学校を訪問してきました。その他にも ESL 国のマレーシア、シンガポールも訪れましたが、たまたまちょうど小学校が休暇期間に入ったときに重なり、小学校英語の授業参観は叶いませんでしたが、教育委員会の方や、大学教員に小学校英語事情を聞いてきました。

各国の全ての小学校英語事情がわかったわけではありませんが、日本と同じ EFL 環境にある中国、台湾、韓国は、日本が仮に 2020 年までに小学校で英語を教科化したとしても、30 年程遅れを取ってしまうのではないかと思うほど、小学校英語科に力を入れています。中国と韓国は国からのトップダウンの要素が強い印象がありますので、日本はこのようなスタイルがあっているのかもしれません。一方、台湾はフォニックス指導を取り入れるなど国からの基本方針は感じられるものの、担当教員の自由度が高く、将来の日本の参考になると思われます。

上越教育大学は台湾とは現在 2 つの国立大学と交際交流の提携を結んでいます。嘉義大学と新築教育大学です。前者は台南に近い嘉義市にあり、嘉義市は台北から高速鉄道(新幹線)で 1 時間 30 分程のところにあります。後者は台北から高速鉄道を用いると 30 分の所要時間である新竹市にあり、本学の美術コースが中心となり相手方の美術コースとの交流を進めています。どちらの大学にも附属小学校があり、私はどちらも複数回、訪れています。どちらの附属小学校も 1 年生から大変素晴らしい英語教育を行っています。嘉義大学の附属小学校は、主に私のゼミ生ですが、日本の文化を紹介する授業をさせていただけることから、毎年のように訪問しています。

まず、気づくのは、英語教員の英語力が優れていることです。英語力があり自信があることが

大きいのかもしれませんが、教員に余裕が感じられます。教員同士の交流も密です。台湾は少子化という理由もあり、小学校英語科の教員になるにも恐ろしい倍率であると聞いています。場所によっては 2 名の公募に対して、応募者が 2000 名であったということです。私がここ数年毎年のように訪問している国立嘉義大学附属小学校の英語教員はアメリカの大学院の修士号所持者がほとんどで、働きながら、博士課程に通っている教員も数名います。英語教員の英語力が高いので、ネイティブスピーカも不要なくらいですが、同校では 2 年前からアメリカ人の教員も採用しており、1・2 年は週 1 回、3 年生上は週 3 回の英語の授業が実施されています。低学年はそれぞれの学級で台湾人が、3 年生以上は 3 段階の能力別に編成され、英語教室で授業が行われています。3 時間のうち、アメリカ人のネイティブスピーカが 1 時間を担当しています。

初級のクラスは担当教員と口頭でコミュニケーションを取ることが達成目標であり、上に行くほど、読み・書きが加わります。上級のクラスの中には児童は帰国子女もいるので、英語教員も緊張することもあるそうです。上級クラスは、授業の他に e メール交換やテレビ会議など国際交流プロジェクトも用意されています。

嘉義市は市長が教育熱心で、公立の全ての小学校に電子黒板が設置されています。小学校教員は水曜日の午後は授業がなく、そのかわり年間 75 時間の研修が課されていて、水曜日に研修を重ねるとのことであり、この 75 時間をクリアしない場合には昇級なしとのことです。このような機会に電子黒板用の自作教材を作る研修も受け、英語教員は嘉義大附属小学校はもちろんですが、一般の公立小学校の教員であっても、電子黒板を自在に用いて英語の授業が行われています。

毎年、何か新しいことを学べ、毎年違う授業を参観させていただけ、本当に勉強になります。このような授業の様子は、大学の授業や教員の免許更新の時などに紹介しています。

嘉義大学の附属小学校と上越教育大学附属小学校は国際交流も実施しており、実際の児童の受け入れの他に、テレビ会議やビデオレターの交換も実施しています。この 1 月には上越教育大附属小学校のご好意もあり、嘉義大附属小の 3 年生 1 名の 1 週間の体験入学も実現しました。5 日の体験入学ではありましたが、私と昨年 12 月に嘉義大学附属小学校を訪れた大学院生がお別れ会を参観し、とても暖かいい会で、思わずもらい泣きをしてしまいました。

これからも機会を設けて、大学院生、学部生と共に訪れ、交流を続けていきたいと思っています。

嘉義大学附属小学校の授業風景

嘉義大学附属小学校外観

大切なことは

大学院１年　言語系コース(英語)
植松秀輝

「どうして教師になろうと思ったの？」と大学院に入学する前も後も、周りの人に幾度となくこのように聞かれます。しかし、私の答えはどこかぎこちなかったり、その都度微妙に変わったりします。それは本当の動機を言いたくないからです。

私は幼いころからずっと野球が大好きでした。私が 5 歳のとき、3 つ上の兄が野球に入ると毎週試合に付いて行き、部活動が許される小学校年生になると即刻野球部に入部しました。監督は 30 年以上もそのチームを指揮している県内でも有名な方で練習は厳しかったですが、必死に練習についていき、6 年生の時にはキャプテンも務め、将来はプロ野球選手になりたいと思いました。

中学では学校の部活動はせず、車で１時間もかかるところにあるクラブチームに入りました。しかしここでの野球生活は文字通り「地獄」でした。練習や試合で失敗すれば顔を殴られ、冬は吐くまで走らされました。殴られて鼻血を出したことも一度ではありません。ここでも一応キャプテンを務めましたが、この３年間のうちに野球選手という夢は自然と消えてしまいました。

高校は近くの公立高校に進学しました。野球部は強くなく、学力も決して高くない普通の高校でした。一応進学クラスがあったので野球もほどほどにやりながら大学に行こうと考えていました。しかし、ここで出会った野球部の顧問の先生が私に大きな影響を与えました。非常に熱い方で、公式戦で数えるほどしか勝ったことのない高校にもかかわらず、自分たちを甲子園に連れていくと言っていました。最初は誰も甲子園など目指していませんでしたが、監督の熱意に影響され、必死に練習していく中で徐々に試合で勝てるようになり、３年生になる頃には全員が本気で甲子園を目指していました。結局甲子園に行くことはできませんでしたが、目標をもってこれ以上ないほど必死に努力した経験は私の一生の宝です。

野球部引退後、無事に受験を乗り切り大学生になりました。一人暮らしをしながら毎日友達と遊びまわる日々は、今まで野球漬けでまともな休日などほとんどなかった私にとってとても新鮮でした。しかしそれと同時に、打ち込めるものがないという虚しさもどこかで感じていました。そしてふとしたきっかけで母校に行き、後輩に野球を教えていたとき、高校時代の野球に打ち込んだ日々を思い出し、自分にはこれしかないと思いました。高校の教師になって野球部の顧問として生徒たちと一緒に甲子園を目指すと決心しました。これが、私が最初に教師を目指そうと思ったきっかけです。しかし、高校教師は部活動だけが仕事ではありません。自分の部活の生徒だけ面倒をみればいいわけではなく、教科指導も進路指導もしなければなりません。生徒の将来に関わる仕事をする者として責任と使命感を持って生徒に接しなければなりません。しかし私は部活動をやりたいからという理由だけで教師を目指しました。このことに後ろめたさを感じ、理由を聞かれても野球のことを口にするのはできるだけ控えてきました。

当時の私は教師を目指すとは言ってもどの教科の教師になるかは決めていませんでした。自分が比較的得意で、なおかつ好きだった教科は社会と英語だったのでどちらにしようか迷いましたが、英語を教えながら部活動を指導するのは大変だと感じ、また自分が英語を使いこなし教えている姿も想像できなかったため、社会にしようと考えていました。しかし、大学生活の後半、旅

行でフィリピンを訪れ、その経験が基となって英語の教員を目指すことを決意しました。もちろん当時（今も）英語は話せませんでしたが、海外に来て気分が盛り上がっているせいか、機会さえあれば積極的にコミュニケーションを取ろうとしました。そのなかで、国籍も、育った環境も文化も全く違う人たちが 1 つの言語を通じて相手のメッセージを理解し、少しでもお互いについて分かりあえることは本当に素晴らしいことだと思いました。言葉を交わさなければお互いのことをイメージでしか推し量ることができませんが、言葉によって相手の心の中にあるものを直接感じることができます。この経験を通じて、今まで野球しか語るものがなかった私に、初めて野球以外で将来の生徒に伝えたいメッセージを持てたように思いました。

現在大学院で学んでいて、自分はどのような教師になるべきなのかと日々考えながら生活していますが、その時、動機というものはそれほど重要ではないように感じます。なぜなりたいと思ったかということを振り返ってみてもいまは何も変わりません。それよりも、自分は生徒に何を残していけるのかと苦慮する方がよほど将来の生徒のためになると思います。大学院に来てある先輩から、「理解というのは相手の下に立って支えてあげて始めてできることだ」と教えていただきました。本当にその通りだと思います。上からではなく、相手を思いやって気持ちを推し量ろうとする。一方的に要求するのではなく、生徒のためを思い、彼らが何を考えているのか知ろうとする。そういった一人の人間として大切なことを自分自身常に心に持ちながら、それを生徒に伝えていけるような教師になりたいと思います。

感じる瞬間

大学院 1 年　言語系コース（英語）
坂上大樹

誰にでも物事を「感じる瞬間」というものが存在し、いつ、どこで、何を、どんなふうに感じるかは人それぞれ異なります。そしてこの感じる瞬間の前の自分とその後の自分では、大きな変化が生じ、この瞬間こそが成長できる瞬間だと私は思っています。私が教員を目指し始めたのは中学 3 年生の頃、この「感じる瞬間」に出会ったことがきっかけです。

私は中学生の頃、バスケ部に所属していました。私の入学と同時にバスケ部の顧問も異動してきました。入部して 3 ヶ月、先生が怒ることはありましたがそこまで厳しくなかったため、楽しく練習していました。しかし 3 年生が引退し、世代交代してから練習は激変しました。これまでとは比べ物にならないほどのハードな練習、理不尽な問答や暴言暴力。肋骨を殴られて骨にひびが入った仲間もいました。今では体罰と判断されるものばかりです。殴る、蹴るは日常茶飯事で、少しのミスで半日正座や「止めていい」といわれるまで指立て伏せ、ダッシュ。「自分を殴れ」と言われることや「選べ。俺に一発殴られてすぐに練習に戻るか、練習終了時まで階段を走るか、声を出し続けるか、指立て伏せをするか、帰るか」と言われること。とにかく理不尽なものばかりでした。部活帰りには仲間と毎日のように「部活いきたくねー。部活やめようぜ」と話していたものです。私たちのチームはあまり試合で勝てませんでした。その苛立ちもあってか、当時はメンバー全員が顧問を嫌っていたと思います。

そんな中、私たちの代になってからのある合宿がありました。それを終えてから私の中で「感

じる瞬間」が訪れました。その合宿とは全中 2 位になったチームと私たちのチームを含め 3 チームでの合同合宿。それはもう厳しい 2 日間でした。合宿を終えてからも癒えない疲労、そして合宿で行ったメニューがこれからの練習に導入されるであろうという不安。今でもはっきりとおぼえています。ですが合宿を終えてから試合で勝てるようになりました。「俺たち、強くなったな」と感じる瞬間でした。その頃から厳しい練習や先生の対応にも意味があると実感し、先生への嫌悪感は消えていました。

そして人生の中で忘れられない「感じる瞬間」がやってきます。中学校最後の大会、私たちは残念ながら県大会に行くこと叶わずに負けてしまいました。今でも鮮明におぼえています。体育館の外で保護者が見ている中、顧問からの最後のお話。これまで 3 年間、鬼のように恐く、厳しかった先生が話の途中で泣き崩れました。「おまえらは出せる力を最大限に出した、勝てなかったのは俺のせいだ、本当にすまない・・・。」。試合に負けてからもう涙が出ないというほど泣いた後であるにもかかわらず、これまで一度も見たことのない先生の泣く姿を見て、私たちは号泣しました。上に進むことはできませんでしたが、やってきた 3 年間は無駄ではなかったと思います。その瞬間、私は「先生は本当に俺たちのことを想ってくれていた。先生の指導があったからこそ、今の自分がいる。こんな自分と同じようなことを感じさせる教師に自分もなりたい。」と感じました。これが私の中での一番の「感じる瞬間」です。

決してスパルタがよいと言っているわけではありません。私にとっては成長できるきっかけになりましたが、実際に部活をやめた人もいました。もちろんどんな理由があるにせよ暴力はやってはいけません。ただ教師の根底にある生徒にこうなってほしいという熱い気持ちが顧問から伝わってきたと思います。今では当時のメンバーと先生を交えて飲んだりもしていますが、「嫌われてもいい、それで何かに気付いてくれるなら。」とおっしゃられていました。優しい先生であろうが、厳しい先生であろうが、その奥底にあるものを生徒は感じるものだと思います。昔から変わらず、今でも熱い気持ちを変わらず持っていて、尊敬する部分です。

気持ちを込めて生徒に伝えようとする教師もいれば行動で伝えようとする教師もいます。逆に言葉だけで伝わる生徒もいれば伝わらない生徒もいます。十人十色であり、何が正解かというものはないのかもしれません。大事なことは、自分の中でこれだけは曲げないという信念を持って教壇に立つことだと思います。大学院に来て、優しく指導して頂ける教授の方々や周りにはお手本となるような先輩、切磋琢磨できる仲間がおり、刺激を受ける毎日です。まだ教壇に立ってない未熟者ですが、教師になるために、そしてなってからのために努力していきたいです。そして曲げない信念を持ちたいと思います。

キレンジャク

不器用

大学院 2 年 言語系コース(英語)
中村 岳

振り返れば大学院入学時、学部時代の友人達はすでに公立・私立学校の教員として働き始め、そういう現状に対してまだ学生でいる自分自身にふがいなさを感じ、早く社会人にならなければ…と焦っていた。恥ずかしいことだが、そんな自己嫌悪と焦りのため新しい環境での生活に順応できずに毎日塞ぎ込んでいたような気がする。夏には、自身の不注意で引き起こした両腕骨折がきっかけで、英語コースの皆に色々お世話になった。入学して初めて人の温かさに触れた。この頃から徐々に自己開示ができるようになったと記憶している。

あっという間に 1 年が過ぎ去り、再び採用試験の季節になった。3 回目の受験である今年は、過去の受験経験を基に二次試験の対策を重点的に行った。ゼミの先生・同じ自治体を受験する先輩・P プラの先生・現職の先生方など、多くの人の協力を得て臨んだ試験の結果は、「不合格」だった。結果を見た瞬間、目の前が真っ暗になり吐きそうになった。緊張の糸がプツリと切れた 10 月は、前向きなことを一切考えられず、授業が終わればすぐ家に帰って部屋に引きこもるという堕落的な生活を繰り返していた。「自分は劣っている人間だ」「自分は教師に向いていない」、という言葉で頭の中がパンクしそうになり、教員になるという長年の夢を諦めかけていた。一人でそんな気持ちを抱え込むのが限界になり、ある日の夕方、父親に教員を目指すのを諦めることを伝えた。

「俺が 20 代の時も、絶望しかなかった。」 父親は私の目を見ながら、自分の過去をゆっくり話してくれた。両親と大喧嘩をして進路を決断したこと、仕事に就けず地獄のような日々を過ごしてきたことなど… 普段父親と腰を据えて話す機会があまりなかったので、父親の口から紡ぎだされる話の一つ一つが新鮮に聞こえた。しかしそれ以降、将来について具体的な話は一切せず、父親は仕事の関係で消えるように海外へ行ってしまった。

11 月のある日、父親が海外から私のアドレスに突然メールを送ってきた。メールの内容は単なる事務連絡だったが、メールの末尾には、

「お前も親の言う通りではなく、自分で考え、自分でしたい道を歩むべきだ。」

という一文が添えられていた。不器用な息子に宛てる、不器用な父親なりのメッセージだった。

私は非常に不器用な人間である。頑固・要領が悪い・口下手・頭の回転が遅い… など自分の欠点は挙げだしたらキリがないし、落ち込むばかりの毎日である。しかし、こんな不器用な人間でも、少しは自分の好きなように夢を見てもいいのではないだろうか。自分自身を始め、他人を全力で受容・共感・肯定できるような人間になるために、今までの挫折をバネにしていきたいと強く思っている。

4 ラウンド目のゴングが、今ここで静かに鳴った。

校長の眼　～つぶやき・うたかた～

連載　第 10 回

礼節を知り忍耐力のある人間になるために　～ものは考えよう～

苫小牧市立明野中学校
校長　佐々木郁夫
（平成 4 年度修了生）

このごろ、身勝手な振る舞いをする人、非常に不作法な人、他人の迷惑を顧みない人の姿が目立ちます。いくつかの例をあげます。身障者や配慮の必要な人が利用する駐車スペースに堂々と自車を置いている、コンビニのゴミ箱に自分の生活ゴミを入れる、たばこや空き缶などのポイ捨て、ところ構わず大声で話したり、ケータイで通話する、赤信号を無視して横断する歩行者や自転車、スーパーや公共施設等で騒ぎ走り回る子ども、そのそばにいる親、公道で大音量の音楽を流して踊る若者などなど。

羞恥心や遠慮、謙譲の美徳といった言葉が死語に等しくなり、傍若無人で他人がどう感じようが意に介さない人間が増え続けているとしたら悲しむべきことです。節度や慎み、思いやりの心を失った社会がもたらす先にあるのは、自己中心、猜疑心、憎しみや怒り、感情の赴くままに攻撃、狡猾な言動や行動が大勢を占めることになります。そして私たちの生活する社会が世界各地で繰り広げられているような対立や敵対、暴動、内戦といった無秩序で混乱する状態になっていまいます。

聞き慣れない、言い慣れない言葉である「公衆道徳」は社会生活を営む一人一人が守るべき社会的規範です。今さら何をと思うかもしれませんが、私たちは好むと好まざるとにかかわらず、集団生活をしています。誰の世話にもなっていないと言う人であっても、一人だけで生きているのではありません。一人で生きていくことは不可能です。だれかのおかげで日々の生活が成り立っていることを忘れてはいけないと思います。私たちの身の回りから周囲のみなさんへ対する感謝の気持ちが薄くなっているような気がします。何でもあって当たり前、なければ不都合、不満、不快というわがままな悪しき心が蔓延している風潮すら感じます。自分に何かをしてもらうことに敏感な割に自分以外へ対する敬いや施しの心、犠牲的精神が乏しい傾向にあります。

他人のことなど構っていられるかという考えがあります。確かに殺伐とした世相の中で、正義感から誰かを注意したり、たしなめると逆上されて命まで奪われる危険性さえあります。触らぬ神に祟りなしではあります。公衆道徳について、私たち一人一人がＴＰＯをわきまえて、自分の振るまい、言動、行為がどのような影響を及ぼすのかを真剣に考える必要があります。私は常々自校の生徒には礼節を知り、誰からも信頼される心温かい人になってほしいと願いますし、世のため人のためになるような大人に成長するよう期待しています。

ここで「ひとつ拾えばひとつだけきれいになる」鍵山秀三郎著の“苦境時の心構え”を紹介します。

人も企業も、一直線上で伸びるということはまずありません。必ず停滞するときがあります。ときには落ち込むこともあります。

そんなとき、どういう心構えでその時期を過ごすかが大切なポイントです。私がこれまで実践してきたポイントを３つ紹介します。

①周囲のせいにしないということです。もちろん、愚痴もいけません。身の回りに起きていることはすべて必然。感謝して受け止めるというのが正しい姿勢だと思います。

②苦しみはできるだけ自分ひとりで背負い込み、周囲の人まで巻き込まないということです。苦しみをすべて人に打ち明けたからといって、苦しみから逃げられるわけではありません。喜びはともかく、苦しみは人に打ち明ければ、苦しむ人を増やすだけです。

③苦難はいつまでも続かないということです。苦難は自分を鍛える貴重な試練。「飛躍する力を蓄える、またとないチャンスを天が自分に与えてくれている」と受け止めることです。順境のとき「力を蓄えろ」などといわれても、なかなか真剣に受け止めることはできません。人が真剣に考えるのは、苦難に直面したときです。

以上、３つのことを自分自身に言い聞かせ、いま自分にできることからひとつひとつ始めることです。「工夫次第」「努力次第」「自分次第」を受け入れたときから不思議と人生が好転します。

いかがでしょうか。鍵山秀三郎さんの言葉から私は「ものは考えよう」であること、そして今の時代は公共心ばかりでなく忍耐力が消失気味だと感じています。私事を少し披露させていただきます。

私が現職教員として上越教育大学の大学院在学当時のことでした。Ｍ１時の履修科目で学んだことを発展させ、地元上越市を紹介するビデオを作成しました。第一回目の撮影には終日費やしてもまだ不足し、日を改めて様々な特色ある歴史的建造物や観光資源などをビデオテープ一杯にしました。ところが、いざ再生をしてみるとまともに使える映像は皆無に等しいことが明らかになり、クルー一同は落胆の色を隠せませんでした。その理由は撮影技術の未熟さもさることながら、映像を通して訴えるべき要素が決定的に不足していました。あのままでは、素人の家庭ビデオにも劣ってしまうという残念さを今になって思い出しました。遠くまで出かけて時間をかけ取り組んだ成果が水泡に帰した感がありました。ところが、この失敗が生きることになります。撮影メンバーは失敗を教訓として学び、再度より良い映像を求めて東奔西走、欣喜雀躍という言葉を謹呈したいほどの活躍ぶりを見せました。私は春日山の山腹で飛田牧弘氏（現東京都立豊多摩高校副校長）が無心に絶好のアングルを求めていたのを思い出します。折しも山頂からお盆の帰省ラッシュで車が行き交う様子が見えました。お盆の真っ最中に私たちのような行動をしていた人間もいたのです。

やがて飛田氏のナレーションによる最終の編集完了後、このビデオはジョーンズ講師の協力を得て“A Joetsu Sketchbook”と名付けられ、新潟日報や朝日新聞紙上で取り上げられました。話題が話題を呼び、一応当時のコース長だった私がＢＳＮラジオに生出演したり、ＪＣＶ（上越ケーブルビジョン）にも登場してしまいました。勢いづくと恐ろしいもので単なる思い出づくりの域を超越した労作といえる出来栄えとなりました。指導してくださった元ＮＨＫディレクターの宇佐美昇三先生からも過分な賞賛のお言葉をちょうだいしました。池内正幸先生（現津田塾大学教授）がボストン在住の米国人にビデオを視聴してもらい、その感想を集めてくださいました。

米国人の見た上越市への興味深いコメントが思い出されます。まさに人生は糾える縄のごとし、人間万事塞翁が馬を実感したのが邦題“上越スケッチブック”の作成から完成に至るまでの道のりでした。ものは考えようであり、忍耐力の大切さを体験した一コマを紹介しました。

私がこのコーナーを担当してからちょうど１０回目の連載となりました。毎回、締め切り日を意識して書いてきましたが、長続きしているのは読者の顔を考えているからかもしれません。今の時代は不特定多数の人々がネット上を舞台にして情報を交流し合い、一瞬にして膨大な量の文章や画像、映像などが世界中を駆け巡ります。恐るべき時代であり、ガラケーの私のうかがい知ることのできないご時世です。なるほど世知辛く血も涙もない時代であり、誠実とか真面目が笑われる対象にまで貶められる世相でもあります。冒頭で触れた公共の場、公衆の面前を無視した行動が平気で行われる悪しき風潮が蔓延しています。せめて、身近なところから安心と安全が確保され、穏やかでにこやかな毎日を過ごせる社会を築きたいです。本稿の読者は私への共感的な理解ができるみなさんだと思っていることを付け加えて結びとします。

原稿と感想・ご意見の募集

JAELEN では皆様の原稿を随時、募集しております。皆様の近況報告、エッセイ、上越時代の思い出、英語教育に関する話題、過去の掲載記事に関する感想など、お好きなトピックで原稿をお寄せ下さい。お問い合わせは JAELEN 編集委員会（北條、野地、飯島： e-mail: iijima-hiroyuki@spu.ac.jp）まで、ご連絡ください。

編集後記

本号をもって、JAELEN は第 10 号になりました。「校長の眼」の連載を続けてくださっている佐々木先生が本号で言及されている上越市紹介ビデオ A Joetsu Sketchbook は私にとっても懐かしい思い出です。夏祭りの撮影のために、佐々木さんと飛田さんのお二人が上越に残り撮影をしてくださったことは今でも良く覚えています。その時から既に 20 年です。

JAELEN も発行以来 5 年になります。JAELEN の編集を通して現役院生の決意や修了生の皆さんのその後のご活躍に触れる度、大学院受験の為に直江津駅に降り立った日を思い出します。私たちには、それぞれの上越の日々があり、上越での時間と出会いが私たちを支えてくれていると思うのです。

（編集委員 H.I.）

2014 年 2 月 1 日発行

発行者　上越英語教育学会

ニューズレター編集委員会

北條礼子（上越教育大学）

野地美幸（上越教育大学）

飯島博之（埼玉県立大学）